春夏秋冬

桜桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
春夏秋冬

【Ｎコード】
Ｎ６９０１Ｙ

【作者名】
桜桃

【あらすじ】
とりあえず、短編集です♪
『春』『夏』『秋』『冬』
それぞれの季節の中でうごめいていく恋心・・・。

『冬』　外降る雪のように・・・

ちらほらと・・・

雪が降ってくる。

東京では珍しいくらいに降る。

「ねぇ、新一。
　これだけ降ればつもるかな？」

窓にへばりついて聞く蘭に

新一は呆れた声を出した。

「いや、溶ける。」

「え～、なんでー？」

「雪は地温が低くなってからつもるんだ。
　まだ、地温があたたかい東京ではつもらねぇよ。」

「でも、アスファルトってすぐ冷たくなるじゃない。」

「アスファルトは冷たくても、
中の土があたたかったら意味ねぇんだよ。
その土があたたかいせいで溶けるんだからな。」

「ふーん。
じゃあ、今年のホワイトクリスマスは期待できないね。」

残念そうにつぶやく蘭。

「ったく、本当に女ってーのは
ロマンチックなのが好きだよな。」

「そりゃそうよ。
だって、見てるだけで心が癒される気分になれるでしょ？」

「気分ね、気分。」

「新一の場合、気分もなにもないわ。」

一応、言っておくが

今年付き合い始めた2人・・・・。

それでも以前と変わらず喧嘩。

「和葉ちゃん、新一が紳士的だとか言ってたけど
どこをどう見たらそう見えるんだろ？
私には不思議でたまらないわ。」

「嫌味か、それ。」

「さぁね、そう聞こえるんだったらそうなんじゃないの。」

「おめーなぁ。」

「大体、こんなに雪が降ってて感動しないなんて
信じらんない。」

「なんとでも言え。」

「・・・コナン君だったときは、一緒に喜んでくれたくせに。
新一の格好つけ。」

「あのなぁ、あれは子供のフリをしてたからで、
本気で喜んでたわけじゃねぇよ。」

「わかってるもん、そんなこと・・・。
でもなぁ、新一最近意地悪だし。コナン君だったときのほうが良
かったかも。」

冗談のつもりだった。

「んじゃあ、戻ってやろうか？」

「え？」

「さっき灰原にもらったんだよな。
これを飲めば戻れる・・・って。
ただし、もう二度とこの姿には戻れない。
まぁ、蘭が望むならそのほうがいいかもな。」

新一は蘭に微笑みかけて薬を飲んだ。

「ちょっと、冗談なの！
さっきのは冗談！！出して、出してよ！！
やだよ・・・確かに、コナン君との思い出に浸りたいって思うこともある。
でも、私が好きなのは新一だもん！」

「やーっと、本音を言ったな？」

「え？」

新一はムクリと起き上がる。

「ちなみに、さっき飲んだのはただの栄養剤。
もう一度毒薬作るなんてあぶねーこと、
灰原はもう二度としねぇよ。」

「・・・よ。」

「え？」

「なによ、なによ！
本気で心配したんだから！
新一のバカ！」

「わ、わり・・・」

「あ、謝って許される問題じゃないんだからね・・・
新一、今日のお夕飯抜きなんだから。」

「はぁ？そりゃねぇだろ！」

「知らないわよ。
私をだました新一が悪いんでしょ？」

「大体、お前がコナンが良いとか言うのがいけねぇんだろ！」

「なによー、全部私が悪いって言いたいの！？」

外の雪のように・・・

２人の喧嘩はやまなかった。

『冬』　外降る雪のように・・・（後書き）

とりあえず・・・
『春夏秋冬』という題名をつけたかった
桜桃です。

なんか、フッとひらめいた題名だったんですね。
使いたくて使いたくて・・・
うずうずしてました。

そして、今回！
短編集として書かせていただくことになりました。

皆様、宜しくお願い致します！

『冬』　あったまるから・・・

夏の暑さが嘘のように冷え込む日が続く。

東京の冬がこんなにも寒いのなら・・・

北海道の冬はどれだけ寒いのだろう。

「哀ちゃん？」

「吉田さん・・・」

「何か考え事？」

「えぇ・・・まぁ。」

「・・・哀ちゃんってミステリアスだよねぇ。」

「え？」

「不思議な雰囲気でさ。
それが、哀ちゃんの魅力なんだけどね！」

にっこり笑う歩美に
つられて哀も笑う。

「哀ちゃん、コナン君が居なくなって・・・
もう、一年だね。」

「そうね・・・」

「寂しいね。」

「えぇ・・・」

「哀ちゃんは・・・コナン君が好き、だった？」

「え・・・・？」

「1年生のとき・・・同じような質問、したね。
あのときと・・・気持ち、少しは変わってない？」

「あの時と・・・気持ちが？」

「うん。
歩美はね、少し・・・変わったよ。
大好き、コナン君！じゃなくて・・・・
少し、大人目線で見れるようになったと思う。」

「大人・・・」

「絶対結ばれる！
っていうただの空想を浮かべてるだけじゃなくて・・・・
なんか、普通に・・・好きだなぁ。って。」

胸に手を置いて、歩美は話す。

「コナン君が・・好きだなぁ。
って・・・思ったら、ほんのり心があったまるんだ。」

「・・・そう。」

「コナン君ってさ・・・
ココアみたいだよねぇ。」

「え？」

いきなりな言葉に哀は聞き返してしまった。

歩美はポケットから自販で買ったココアを２つ取り出す。

「さっきね、買ったの。
あったかいよ。哀ちゃん、どうぞ。」

「・・・ありがとう。」

歩美は哀に渡すと缶を開けて、

飲み始める。

哀はそっと、ココアを握りしめた。

「ほら・・・
ココアって飲むと優しい気持ちになるでしょ？
そっと・・・心に寄り添ってくれる。
コナン君って、そんな感じじゃない？」

「・・・そうね。
一番悲しいときに・・・傍に居てくれるわ。」

「うん。
コナン君ってずるい・・・」

「私もそう思うわ。
勝手に人の心を盗んでほしくないわよね。」

「うんうん！」

「ま・・・それは勝手な言い分でしょうけど。」

「・・・うん。
哀ちゃん・・・・」

「なに？」

「歩美、哀ちゃんの傍にいていいよね？」

「え？」

「哀ちゃんまで、コナン君と同じように居なくならないよね？」

「吉田さん・・・」

「歩美、哀ちゃんとずっと居たいから・・・」

「・・ありがとう。
心配しなくても、私はどこも行かないわよ。」

「よかった・・・」

胸をなでおろしたようにホッとする。

「哀ちゃんみたいに頭が良かったら・・・
外国に行ったりしちゃうのかな、って不安だったの。」

「・・・」

「ず～っと親友で居てくれるんだよね？」

「えぇ。」

哀の答えを聞くと

歩美は嬉しそうにまた笑った。

『冬』　あったまるから・・・（後書き）

恋話なのか・・・友情話なのか・・・

全然わかりませんが・・・

読んでくれてありがとうございます！！

『冬』　クリスマス♪前編（前書き）

中学生新蘭です☆

『冬』　クリスマス♪前編

『真っ赤なお鼻のトナカイさんはー♪』

どこもかしこもクリスマス色真っ只中。

赤に緑・・・クリスマスカラーがどこを見ても目に付く。

「はー、彼氏の居ないクリスマスだって・・・」

「園子、毎年言ってるよね。」

「彼氏ほしー！」

「とかなんとか言って、いい加減に決められないのが仇だよね。」

「ふー、そうなのよねぇ。」

楽しそうに話しながら歩いてるのは、

帝丹中の制服を身にまとう蘭と園子。

「そういや、買った？」

「え？何を？」

「クリスマスプレゼント。」

「あぁ、園子になら　もう買ったよ。」

「ほんと！？・・・・じゃなくて、新一くんによ。」

「え、新一？」

「そうよ。
去年は中学生になったってことで大人のステップアップ！
小学生のときよりも高額をかけて、プレゼントを買ったじゃない？
今年も当然渡すんでしょ？」

「そうなんだよねー・・・」

「いっつも聞いてなかったけど、
蘭・・・新一くんにいつも何もらってたの？」

「えー？
去年は・・・コートだったなぁ。」

「コート！？

って、今着てる・・・コレ！？」

「うんっ。」

「中学生の分際でなに買ってんのよ。
普通、中学生ってお菓子とかそういうもんでしょー？」

（お菓子は・・・どうかな。）

「でも、そんなこと言ったら
園子だって私に一時、高級品のバック買おうとしてたじゃない。」

「あぁ、蘭にそんな高価なものは駄目。って言われたやつ。」

「そうよ、私アレに似合うプレゼント園子に買えないもん。」

「だから、気にしなくていいって言ったのに。」

「駄目よ！」

蘭をこういった性格は昔から変わらない。

「サッカーボールはもう持ってるし・・・
この間発売された推理小説は昨日買ってたし。
どうしよ～。」

「普通に手編みのマフラーとかでいいんじゃないの？」

「って思ったんだけど、６年生の時に渡してるんだよね。」

「そっかぁ。」

「なんにしようかな～。」

「でも、別にどれでもいいと思うけどねー。」

「そんなこと出来ないよ。」

（そんなこと言ったって、
あの男にとって蘭の”プレゼント”が嬉しいんだし。
もらえれば嬉しい・・・みたいな？）

「明日だから、じっくり考えて・・・
買いなよ。」

「・・・うん。」

蘭は一晩中悩んでいた。

『冬』　クリスマス♪前編（後書き）

前編終了です♪

中編は・・・クリスマスイヴの明日です♪

『冬』　クリスマス♪中編

こちらも、こちらで悩んでいた。

クリスマスプレゼント。

「なぁ、くっどぉ♪」

「んだよ・・・」

「毛利のプレゼント選んだのかよー。」

「それがまだ・・・・・・・・っ！」

「おぉ！やっぱ買うのか！？」

「か、買わねぇよ！！」

今更訂正しても遅い。

「やっぱさー、ぬいぐるみとか？」

「いやー、クッションとかも・・・」

「もう、いっそのこと指輪かってプロポーズしちまえ！！」

「あのなぁ・・・どこの世界に中学生が指輪買うんだよ！」

「あ、そっか。」

「だよなー。」

「っていうか、ぶっちゃけ去年は何あげたんだよ。」

「・・・なんでオメーらに言わなきゃなんねぇんだ。」

去年あげたことを前提に話をすすめる。

新一もいちいち反論するのが面倒くさくなってきた。

「いいじゃねぇか！」

「・・・俺、毛利になにあげたか知ってる。」

「澤田！それ、本当かよ！」

「あぁ。去年のクリスマスシーズン、工藤が女物の店に入ってくのが見えたからなんだろうと思って。」

「何かってたんだよ。」

「香水だったぜ。」

「香水ー？」

「あぁ。」

澤田の言葉に新一はホッと安心するように声をだした。

「それ、俺じゃねーよ。」

「なんでそう言えるんだよ。」

「おっ、ここまできて言い逃れか！？」

「嘘ついてんじゃねーよ。」
「嘘じゃねーよ、蘭にあげたのはコートで香水じゃ・・・」

よほど切羽詰ってるのか・・・
本日二度目の・・・『今更訂正しても遅い。』

「そーか、去年はコートか。工藤。」
「そーか、そーか。
あのコート、工藤がプレゼントしてたのか。」
「結構センスいいじゃん、工藤。」
「そうそう。毛利に似合ってて、さっすが工藤。」
「旦那の見る目は違うなっ」
「だ、旦那じゃねーって言ってんだろ!?」
「はいはい。
さて、本題は今年のプレゼント・・・」

と面白そうに話題を戻す。

新一はこれ以上付き合ってられない。という顔つきで教室を出て行った。

「はぁ。」

それにしても、本当にどうしよう。と今更考える。

第一、今日がクリスマスイヴだなんて、今日知ったくらいだ。

「はぁ・・・」

ふと、見上げると『ＭＩＹＡＫＯＳＩ家電』と書かれた看板が目に付く。

ずらりと並んだテレビにはきらめく時計が映し出されていた。

『2．４カラットの宝石がちりばめられた時計・・・』

『キレイですねぇ。』

「あいつ・・・・」

「蘭、今日は遅くなる。」

「えー？また麻雀？」

「あぁ、まぁな。」

「もぅ！」

「どうせ、有希ちゃんとこで去年見たくクリスマスパーティでもすんだろ？」

「だから、何度言えばいいのよ！
新一のご両親、先月から海外に移住したって。
だから新一今1人暮らしなのよ。」

「あー？そうだったっけなぁ。」

「そうだったっけなぁって・・・」

「んじゃあ、行って来る。」

「ちょっと！お父さん！！」

バタンとドアが閉まる。

「・・・プレゼント、渡せないのかな。今年・・・」

可愛くラッピングされたプレゼントを見ながら呟いた。

『冬』　クリスマス♪中編（後書き）

前編より、内容が濃い気がする・・・

まぁ、それは置いておいて！

後編は今日の夜に更新したいと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6901y/

春夏秋冬

2011年12月24日06時45分発行